

光明主義の主要特徴

光明主義の首唱者仏陀禪那弁栄聖者（1859～1920）は後継者である笹本戒浄上人（1874～1937）に「私は聖典に依て演繹的に説くのではない、帰納的に説いている」と申された。即ちそれは聖典の教える所に基いて演繹的に説くのではない、聖典に書いてある如来の事実、如来の真理の法則を纏めて光明主義の教学体系を組織したのではない。自分の体験に基いて帰納的に如来の真理を説く、自分の体験された如来の事実から帰納的に光明主義の教学体系を組織したという意味である。

有限回数之三昧体験によつて大ミオヤの真理法則を直観し、大ミオヤの真相を認識するのに、不完全帰納と完全帰納の二つの場合がある。

体大法身を根本仏とする立場は、大ミオヤの体相用の一切が本より円成実性の真実在である事実を認めない体系であるから不完全帰納の三昧直観である。

弁栄聖者は三身四智の仏眼を豊かに実現して、法身の中心である内的目的論的報身を真実の自己とする御境界で、絶対円満な真実在である無量光より超日月光に至る十二の光明の一切と合一しておられた。それで有限回数之三昧体験によつて、絶対の報身の真実を完全帰納的に三昧直観せられた。聖者は三身四智の仏眼で、応身仏積尊が円満な三身四智の仏眼を実現して、御自身の本仏である絶対の報身の核心に直結する最尊

の見仏を衆生教化の中心とせられた事実を如実に認識して、光明主義に於ける見仏の道として御教示になった。

光明主義の見仏が晩年に三身四智の身となっておられた善導大師、法然上人の真精神であり、光明主義に依つて各宗各派の祖師の精神が生かされるというのも、弁栄聖者の真精神の御教示が三身四智の仏眼による完全帰納的な御教えであるからである。

今、慶応義塾大学教授田中木又先生（1884～1974）がライフワークとして集大成された聖者の膨大な御遺稿集『光明大系』の山塊は、一見幾重にも重なりあうこの地球最高のヒマラヤ連峰にも喩うべき巨大な山並みであつて、果して幾峰に分け得られるか、これはなかなか至難の業ともいうべきである。かつて伊予の松山大林寺の聖者直弟子大島玄瑞師は昭和三、四年頃から五年にかけて、いみじくもこれを六つの峰に分けられた。これが今日、世間に流布している「光明主義の六大特長」である。（全集下巻四四〇頁参照）

ただし、後日戒浄上人が「これは光明主義の主要特徴の一部分である」旨申され、上人直弟子達に庭訓の中よりこれを補完すべきを密かに希望された。それで今日まで泉虎一氏をはじめとする上人直弟子達の纏めた上人指南広録の中より、師父聖者によつて初めて開闢された「光明主義の主要特徴」を選び、その語要を左に列挙して、敢えて有縁無縁の光友諸兄弟の法鑑に呈することとする。

一、所帰の本尊

(1) 如来の自境界より大宇宙の真相を見る時は、大ミオヤの体相用の一切は本より絶対円満、不生不成無作無

為の眞実在で、無始以来無量光より超日月光に至る十二の光明の全徳が顕現しておる絶対界に在まして永恆自存しておられる。この大ミオヤが私共の信念に報いて光明摂化して下さる心本尊という面より拝して、三身即一に在ます本有無作の内的目的論的報身と仰いでお慕い申してお念仏する。

(2)報身——広義と狭義

(イ)広義の報身——大宇宙全体の絶対中心としての超在一神の汎神に在ます大ミオヤ。本より独立自存する大宇宙全一の絶対的現象態で、自然界と心靈界全体の根本仏。又これを本有法身、法性法身とも申し上げる。(註、自然現象と心靈現象の根底としての広義の法身のことではない)したがって方便法身は応化身、即ち釈尊の如き人仏教化身を申し上げることとなる。

(ロ)狭義の報身——心靈界の主本尊としての報身。(註、自然界の根底としての狭義の法身と対応する)

二、十二光仏

円成実性の眞実在である無量光から超日月光までの十二の光明は、自然界と心靈界の全面を含んだ広義の報身の光明である。

三、報身如来蔵性

従来は円成実性の眞実在である体大法身を大宇宙の心靈と自然の一切の差別の現象の根源として、法身如来蔵性を説く。この立場で平等即差別を見る。

光明主義では法身の中心である絶対の報身の独立自存する大宇宙全一の円成実性の妙色相好身を大宇宙の心霊と自然の相対因縁因果の一切の差別の根源として報身如来蔵性を説く。この大宇宙全一の円成実性の妙色相好身の一切の規定条件を離れた絶対不変、無差別平等の面と大宇宙の相対因縁因果の無限の変化の差別の面で、平等即差別、真空即妙有を見るのが光明主義の固有の立場である。

四、光明主義の念仏は成仏の中心道、直線道としての念弥陀三昧・王三昧である

(1)縁起と実相を統一調和する故

絶対の報身御自身の無量光より超日月光に至る十二の光明の一切が本より絶対円満な真実在であるから、空間的な実相と時間的な縁起が統一調和する。体大法身は円成実性の真実在であるが、如来の相との差別は体大法身の理法に規定せられる立場では、縁起と実相の完全円満な統一調和はあり得ない。

(2)理感二性を統一調和する故

無量光より超日月光に至る十二の光明が本より円成実性の真実在である。即ち理性と感性は同位の絶対円満な真実在であるから、理性と感性が円満に統一調和する。体大法身は円成実性の真実在で差別の内容である感性は体大法身の絶対理性に規定せられるのであれば、理感二性の円満な統一調和はない。

(3)平等と差別、真空と妙有のいずれにも偏しない中道故

心に想い上げておる報身の慈悲の聖容は、自分の信念に相応した相対因縁因果の差別の妙色相好身（妙有）と感じながら、実に一切の規定条件を離れた絶対不変の真実在である平等の御姿（真空）だと直観す

る。平等と差別、真空と妙有の何れにも偏しない、平等と差別、真空と妙有が融合統一した念仏である。

(4) 主観と客観のいずれにも偏しない中道故

心に意識せられる絶対の報身の絶対不変の真実在である妙色相好身を真実の自己の色身と感じながら、心本尊としてお慕い申すとしかとお育て下さる。即ち主観と客観のいずれにも偏しない念仏である。

(5) 感覺感情知力意志の四方面の最高統一態である絶対の報身の十二の光明の全徳の顕現である其の慈悲の聖み

容を念わずると四方面が円満に調和する故

(6) 三身即一の本有無作の報身を心本尊としてお慕い申しお念じ申す故

(7) 光明主義の見仏は無辺光の四智の全般より三昧入神する。詳説すると十二の光明が融合統一しておる核心より三昧入神する故

(8) 一切の凡夫が五根五力の第一歩より認識的一切智を得る終りまで修行の途中で信念の変更を要しない万機普益の最勝最易の見仏故

五、成仏の中心道、直線道としての念弥陀三昧の三十七道品

絶対自身の報身仏の円成実性の体相用が、三十七道品に依て示されている凡ゆる修行法と副次的目的を統一し秩序付けて、終局目的である認識的一切智を内的目的論的に私共が実現する方向に帰趣せしめていく。

六、入信の暁より認識的一切智の夕までの靈育の過程

成仏の中心道、直線道により途中信念の変更を要せず、五根五力の第一歩より子育てを蒙って、三昧が次第に深くなり遂に認識的一切智を得るまでの経過を開示悟入の方面から具体的に教え下された。

開・先に慧眼が完全になり、次に法眼が完全になって、この二つが融合統一して初歩の仏眼を得た所が
感覚的啓示の満位

示・初歩の仏眼が次第に深くなるにつれてミオヤの大智慧と大慈悲の内容と次第に深く合一するようになる。ある程度までミオヤの大智慧大慈悲と合一したところが写象的啓示の満位

悟・さらに進んで法身全体、特に法身の理法と合一した所が理想的啓示。無生忍

入・ミオヤの体相用の一切が不生不成無作無為の真実在である事実を認識した所が無生法忍。三身四智の仏眼の境界。そしてその満位が認識的一切智

七、三身四智の仏眼における一切智を観念的一切智と認識的一切智の二種に区別する

「この世界で認識的一切智を得ておられたのは釈迦さんばかりだ」と教祖釈尊の三昧の内容を、弁栄聖者はこの地上で人間の生理状態が仏化せられた極地の状態の実現として明了にして下さった。

八、往生について二種あり

(1)理想的往生、または精神的更生、有余涅槃

慧眼、法眼、仏眼が開けて、肉体を持ってこの世におる時と、この世を去って一時的に浄土におる時の

二つの場合がある。慧眼、法眼、開示悟の位の仏眼でこの世を去ると、肉体は無いが未だ肉の心が残っておるために一時的に極楽における状態が実現する。

(2) 実在的往生、または身体的更生、無余涅槃

三身四智の仏眼を得てからこの世を去ると、実在的に絶対の報身の大字宙全一、絶対無規定の妙色相好身と合一して、無余即無住処涅槃が実現する。

九、安心起行論について

(1) 心行の形式と起行の用心との二種分別

中心道の心行の形式を重要視するのは勿論であるが、人格完成に全力を注ぐ立場より、起行の用心をば更に重要視して、大ミオヤのお育てを正しく蒙ることを最重視する。

(2) 中心道、直線道の起行の用心に関して

(イ) 中心道の信念に反する一切の廻り道の信念と雑念の三昧を排除する。

(ロ) 用心を総別に分つ。

(a) 総の用心——本有無作の報身と確と合一してお世嗣となるため、ミオヤをいつもできるだけお慕い申し、いつもその慈悲の聖容をできるだけ大きくお念じ申す。

(b) 別の用心——五根五力と開示悟入の各段階において、現実自己の心境より一步高い所を当面の目

標として精進する。

(イ) 中心道の起行の用心により修行している時の三昧の正邪の判断について。

(a) いつも慈悲の聖容をできるだけ大きくお念じ申しておるように努力する。

(b) 信念が完全でも明相、花、景色等を見、香を感じる等は修行未熟のため。

平等に偏した慧眼、極楽ばかりを見る三昧、慧眼法眼の時代に依正共に見る三昧等は信念が不完全でお慕い申し方不徹底のため。絶対の報身の慈悲の聖容を専念して、三身四智の仏眼が開け始めるとつれて初めて弥陀三尊を拝する等の三昧に入るように精進する。弁栄聖者のお言葉の如く「自分は極楽ばかりを見たことがない。仏眼を得てから極楽を次第にはつきり見るようになった」というのは、人格完成に全力を注いでおる証拠。この御聖語は特に重要である。

(3) 一切の凡夫見仏可能の道

(イ) 雲の上に乗身お示し下さった如来様を平面的にお書き下さって、念弥陀三昧を修する時の心本尊という意味で「三昧仏」とお名付けになった。そして「その慈悲の聖容全体に心を注げ。開目閉目これを努めよ。また三昧仏を一定せよ」とお教え下さった。

(ロ) 「所念^{いひよ}彌高遠なれば能念の心随つて高遠」のみ教えを五根五力の第一歩より如教奉行する。

十、徹底的な選択主義

私共がどのような信念でお念じしても、如来は大慈悲のミオヤに在ますから、いつも正しい三昧ばかりをお与えになるかという、「そんな宇宙の法則を無視したことはなさらぬ。大慈悲のミオヤはまた実に神聖

と正義のミオヤに在ます。ミオヤは宇宙の法則に従つて私共の人格を完成して下さる。私共を御自身の全きが如くに円満な仏にしたい、というのがミオヤの聖意みむねで、故に成仏の目的に適わない一切の三昧を捨てていい所ばかりを引つこ抜いて早くお世嗣よせいと成るようにするのがミオヤの聖意に適う所以ゆゑんだ」とお示し下さった。

十一、縁起論

(1)物質現象の発現について

(2)無明について

古来何処から発現するか不明であつた無明と報身仏の体相用の關係を初めて明確に示し、従つて不明瞭であつた自然現象と心靈現象の発現の仕方の相違点、またそれぞれを規定する理法の相違点も明白にされた。これによつて報身の心靈差別の現象が本有無作で、人間の宗教的信念の創り出したものでない事実、仏教で説く自然現象生起論と現在並びに将来の自然科学の立場から論じる自然現象生起論と総合調和する道が切り開かれた。

十二、無生法忍における真理の認識を自然科学的真理の認識の基礎認識、根本認識とする

この立場に立てば今後いかように自然科学が発達しても、光明主義によつて科学を統一総合することができ。自然科学のみならず一切の学問芸術等についても同様のことがいえる。

十三、光明主義は理性主義と感性主義を総合調和した光明摂化主義である

これを縁起と実相の面より見れば、縁起と実相を総合調和した円満な教え、即ち円具教である、ということが出来る。

理感二性については今は暫らくおく。従来の空間的実相論や時間的縁起論はおよそ不完全で、超在一神の汎神教の立場からいえば、大ミオヤの絶対無規定の体相用が発現するのに、

- (1)自然界と心靈界、並びに衆生にどのように顕現するのか
- (2)顕現するのを如来の面からと衆生の面からと区別して

(3)空間的実相論と時間的縁起論を総合統一しなければ十分といえない。

しかし、このように説いたとしても完全円満にしかも如実に如来の事実を昼夜一劫しても説き尽すことはできない。

以上、弁栄聖者によって開顕せられた法門を一往十三峰に分けたが、浅学菲才にして信外輕毛の輩、全般に亘って浅略粗笨の点多々あるを懼れる。しかしもとよりこれ斯教宣揚の微忱に出ずるもの、折角諸先輩の御叱声と御高示を賜れば、幸甚これに過ぎるものはない。またこの『上人伝』に初めて接せられた方々には『笹本戒浄上人全集』上中下三巻がすでに刊行されているので、是非直接それについて御研究下さるよう冀求して止まない。